

阿部順先生

1 鶴見商業「空色。」

家族の事故現場から逃げ去ったと思えば自分を責め、心を閉ざして本の世界に没入する主人公・そら。そらに寄り添い励ますひな。やがてそらは残された家族に向き合い、家族としての役割を果たそうとする。いいストーリーです。苦境に立ち行った時、前を向かせてくれるのはまさに信頼している人からの言葉でしょう。その一方で、ひなの「ゆっくりでいいから、一緒に前に進んでいこう。」などの心打つ言葉が、強く観る側に迫ってこないのです。そらの抱えているものがあまりにも大きいからでしょう。自分の誕生日に母と双子のはなは事故で亡くなり、そして同じ誕生日に父は自殺する。言葉で立ち直るにはあまりに重い不幸の重なり。もう少し不幸の度合いを減らしたらどうでしょう。そうすれば観客ははなの姿に、ひなの姿に自己を投影しやすくなると思うのです。せめて父は一生懸命がんばっていて、その父の背中を描くことでさらに世界が広がると思うのだけど。照明は全体的に暗い感じがしました。暗いイメージなのですが、顔はちゃんと見える程度の明るさは欲しいです。教室の机の配置がバラバラで、一個一個の距離があるのも最初はどうか、と思っていましたが、教室内の心の距離感と見れば納得しました。雨の音が大きくセリフが聞き取れないところがあったのは惜しい。セリフを言う時は勇気を持って音量を下げましょう。土砂崩れのリアルなシーンも抽象化してみたらどうでしょう。現在の姉妹弟からパッと過去に変化するシーンはとてもよかったです。

2 市立工芸「未来へ」

1年生の橋田純寧さんが、この作品を書き、演出したことにまず驚きます。1年生と言えば入学していきなり休校。部活だって途中から始まったはずです。そんな不安だらけの高校生活。それを見事に突き破るハッピーエンディング、サクセスストーリー、痛快です。表彰式の華やかな照明のように将来に夢を描くことが生きる力になるのです。旧校舎の教室に、自称タイムトラベラーが入ってくる、しかも窓から、と言うのがいいなあ。個人的には窓を使う劇が好きなのです。前半の歩美とみはるのやり取りはもう少しテンポの変化が欲しいと思いました。2人芝居はとても難しいですね。いつも2人で稽古しているから、会話が会話でなくなっていく。一人セリフのかけあいのような。つまりいきなり窓から不審者が入ってくれば、例え不審者でないと言い張っても、そう簡単にみはると言う存在を受け入れられないだろうし、みはるも自分がそこにいてもいいようにもっとがんばるでしょう。その緊張感あふれるやり取りこそ表現して楽しいのです。ちょっとおかしいな、と思ったのは、卒業式のスピーチが個人的な理由で別の生徒がやることになったという設定。本当なら学校は大騒ぎでしょう。もともと自分でやる設定でよかったのでは。スピーチはとてもよかったです。前を向いて自己紹介するのは、特に2人芝居ではやらないほうがよいです。2人だけの世界にどっぷりつきましょ。みはるが表彰式で着替えて出てきた時、別の役者が出てきたのかと思いました。それだけ早着替えが見事でした。そしてこのみはる役の長南朱璃さんもまた1年生だったとは！驚きです。

3 りんくう翔南「紅回廊の恋」

いやはや迷都高校という名称が示すように紅回廊の迷路に迷いました。でも心地よい。世界観がしっかり伝わってきたし、ラストで“紅回廊の恋”が観られたから。演劇はめんどくさいところがあります。わかりにくいとわからないと言われ、わかりやすいと物足りないと言われます。私も台本を書いたりしますが、公演を重ねるごとに書き直すのは、つじつま合わせだったり、時系列の整理だったり、説明台詞の追加だったりします。わかりやすくなった分、最初に書いた、勢いのあるセリフやシーンは消えていたりします。でも演劇においてわかりにくさは魔力なのです。観る側の想像力をかき立て、実際の作者の意図とは違う世界を自分の中に描いていたりします。まさに想像させて創造させるのです。今回も私はこの劇を観ながら全く自分の創造物を生み出していたかもしれませぬ。大阪まで来る途中、車中で読んでいたのがシェイ

クスピアの「テンペスト」だったので。劇中劇、というか本筋はもっとスピード感を持ってやるとよいです。テンポです。それに対し、途中から脇筋となる生徒会との戦い（演劇部と生徒会の宿命の対決）は面白いです。劇中劇の間にポンポン現実が入ってくると、より楽しさが増しそうです。音楽と照明はその世界観がよく伝わりました。ただ衣装もそれに合わせて・・・となると演劇部の金銭事情を知っているのでもそこまでは要求しません。

4 追手門学院大手前「合法演劇」

オープニングからぐぐぐぐと引き込まれました！あの冒頭シーンは忘れないだろう。たぶんどこかで使うかもしれません。こうやって老齡演劇部顧問は、若き感性を学んでいくのです。一瞬で世界観が提示され、音楽がかかり、役者が踊り出すと、もうセリフが聞こえなくてもOKでしたが、後で台本を読むと、かなりキーワードが散りばめてあって、だったらちゃんと聞かせて欲しかったな、と後から思いました。マイクやメガホンを使ってのガナリのセリフは、聞こえないよりは聞こえた方がいいに決まっているのだけど、かなりテクニックがいますね。ここは稽古でがんばる。作者の赤井野々華さんが、舞台美術と衣装を担っているのも大きいです。演劇において、言葉が大事なのは当然ですが、ビジュアルな面もこの作品のように高校演劇でどんどん追求してほしいものです。部室に投げ散らかった衣装の山、よかったなあ。

「台本が書けない」ことから「演劇とは何か」「なぜ演劇をやるのか」と演劇部内の根源的な問いかけを続けながらストーリーらしきものは無いのだが、いわゆる演劇部ものとは違うスタイルの、かっこいい表現方法でした。細かいかもしれませんが、自己さんが早口さんを引きずっていくところ（重いだろうに）、舞台袖で蹴り上げるところ、そして蹴られた早口さんが舞台袖から消えるところ、その所作がとってもよかったのです。観客から見えるか見えないかのところまで気を使っているのだから他のシーンの演技力は当然高い。ラストの歌、緞帳が降りると同時に終わってしまいましたが、その歌詞に意味があるのならもっと聞かせてもよかったのでは。じゅうぶん時間は残っていたし。

5 東百舌鳥「ぴえんからのばおん」

今年の作品はコロナ芝居であふれるだろうと思っていましたが、あまり出てこない。府大会前までの自分の感覚から言うと、5本に1本くらいかなと言ったところでしたが、本日府大会1日目、本当に5本目にしてコロナ劇が登場しました。タイトルはよくわかりませんが、副題に「コロナなんかぶっ飛ばせ」とあります。頼もしい！本当に演劇でコロナなんかぶっ飛ばしてほしい。ずっと演劇はコロナにぶっ飛ばされ続けてきましたからね。（と第三波の到来を思わせる感染急増で騒然としている中で書いています。）思ったほどコロナ劇が出てこない理由は、まだ誰もがその真っ只中において、この時代を総合的、俯瞰的に見る余裕がないからなのでしょう。だが「ぴえんからのばおん」は果敢にコロナに挑みます。コロナによってあぶり出された人間の姿を風刺し、コロナをパンドラの箱に見立てる。ギリシャ悲劇が出てきたと思うと、シェイクスピアが出てきて、寺山修司が出てきて、スペイン風邪の豆知識まで教えてくれます。盛り沢山です。ただ劇としては多くの部分が2人芝居なので、これだけのものを処理していくのはとても大変だったことでしょう。特に最初の方でセリフが飛んでしまい、あやういシーンもありましたが、何とか持ち直して後半は安定していました。幽霊男子が出て来たところから劇はぐっと締まりました。であるならもう少し早めに幽霊男子を登場させ、ここを軸に話を進めていくこともありかと自分の中で創造してみました。冒頭音楽がかかって、女刑事役登場。音楽が大きすぎてセリフが聞こえませんでした。部員同士では聞こえても、初めての観客には聞こえないものです。勇気を持ってボリュームダウンを。暗転は見えていることを意識して。大黒幕が開いているので。暗転中の動きも考え、ブルーを入れるとかっこいいと思います。

6 信太「たまゆら」

コロナの休校が明けて学校に行ったら、みんなマスクをしていて、誰だかわからない、触れ合っただけはいけな言われますます学校に行きたくなくなる。唯一の支えだった演劇部の活動もこわくなる。片岡の思

いは、コロナ禍の高校生の、特に演劇部生徒の当時のリアルな思いでしょう。劇後半の高校生たちの思いの吐露は、その誇張しない素直な言い方で、ぐっと心に染みしました。そうだよ、それが言いたかったんだよ、その苦しさ、大人も同じだ。手をつなぐという行為がこれほど感動的に見えるとは！でもここに至るまでのシーンと上記のシーンは少し噛み合っていないように見えました。最初は男子高校生二人の、観客が多ければさらに大いに沸いたであろう、やりとり。そこに宇宙と通信したい変な女の子がやってきて、、、そして可愛い子がやってきて、、、という面白系の流れではなかったか。そう言えば、文化祭の出し物はどうなった？コロナ禍での高校生の思いに至るまでには、もう少し女子高生3人の背景に触れておくべきだったかと思いました。またマスクをする、しないへのこだわり（理由）も描いていれば、そのあたりから自然に前述のシーンに入れたのではないのでしょうか。演技ですが、もう少しテンポアップしてもよいですね。ただし、普段であればその間を観客の笑いが埋めていたんだよな、と改めて現状を思い知りました。タイトルの「たまゆら」と言う言葉に触れてほしいと言う思いと、いやそれはこちらが想像して楽しむべきかという思い二つ。冒頭のUF0の曲、セリフ部分にかかる部分が大きいです。勇気を持ってボリュームダウンを。

7 豊島「あめふりこぞう」

手塚治の原作を脚色。いい話だなあ、とつくづく思っていたら、上演時間が気になってきました。速報値60分26秒。舞台裏ではきっと舞台監督を中心に別のドラマが繰り広げられていたことでしょうか。演劇部顧問としてはまずここから書きます。高校演劇大会では悲しいことに時間制限があります。どんなにいいシーンを創っても、セリフを書いても、ようやく新たな登場人物を創っても、時間制限のせいでカットせざるを得ないことがあります。自分も大会前は、カットのことばかり考えてほとんど稽古は観ていなかったりします。でも時間制限のおかげで失うものの代わりに得るものも多いのです。その一つは転換の工夫です。この劇にそれを当てはめてみます。転換が多い劇なので、一つ一つの転換を見直すだけで3分は縮まるはず（たぶん）。例えば花道でやっていることを舞台の中でやる。それだけでも役者が移動する距離を減らすことができます。二つの転換を一つにする、あるいは同時にやる。転換のスムーズさは劇のクオリティを上げ、テンポのよさを生みます。そして演劇部員の一体感を生むのです。布パネルの使い方、照明の当て方もよく、機械の手作り感がよい。衣裳もよく作りました。ビジュアル感満載です。みんながまとまってこの劇の世界を創り上げ、そのことが感動につながりました。女子の声が高く、叫ぶと聞き取りづらい時がありました。いつも一緒に稽古している部員以外の人に、稽古を観てもらおう機会を持つとよいと思います。

8 追手門学院「学校へ行こう」

小気味よいテンポで進むそれぞれの夢の披露。SNSの知識を十分に学んだ後に続く展開に一気に魅せられました。集団での表現力の高さ、個々の演技力の高さが、短編のつなぎ合わせのように見える脚本を1本のドラマに仕立て上げています。そう、自分たちの、今というドラマ。スマホの世界から飛び出して、生物学に行って、肺魚ミュージカルに行って（一押し）、ダンスして、留学して、あっちこっちへの展開に飽きる暇もなく、次のシーンへの期待が膨らむ。ここまでやれば、装置や衣装がなくてもビジュアルになれるのだなあ。あれだけいろいろな人がしゃべっていても、それぞれのセリフが明確に聞こえ、また受けてもちゃんと聞いていたのも日頃の稽古の賜物でしょう。振り返って思えば、序盤が少し長い気がしました。早めに世界へ飛び出して、さまざまな風景をさまざまな角度から見せてほしい、もっとももっともっと勝手な要求を高め、きっとそれに応えてくれるだろうと思わせる見事な集団創作でした。

東海大学附属大阪仰星「生きていたんだよな」

確かな脚本と、それに応える演技が、完成度の高い舞台を生み出しました。3人のうち2人にいくつかの役に早変わりさせて場面を作っていくのも見事。前半、香港の民主化運動についてシンポジウムを開きたいと言って反対されるユミの姿を描きましたが、この話はいつの間にか消えてしまっていました。ちょっと

これもまた自分の中では創造の世界に入っていたので。後半絡められなかったかという思いが残りました。また、ラスト近く、「意思確認」の声が、生き返れるのは二人のうち一人だけなんていう「聞いてないよ！」的なルールを持ち出すのですが、それはあっさり引っ込めてしまいました。（テンコはさらに成仏できないのか…）このあたり、ではどちらが生き返るのに相応しいか、相応しくないか、人間の性を露わにしながら、一大議論、一悶着あれば面白いなあと思いましたが、これもこちらの創造的楽しみということで。このようにさまざまなセリフが、設定が、観る者を創造の世界に連れて行ってくれる魅惑的な舞台でした。幕開きのシーンはものすごいインパクト、かかる音楽も、照明も劇的効果をこれでもかと高めます。ただあれだけ思い切って音のボリュームを上げるのだから、思い切って下げたらとも思います。セリフとかぶる部分。聞こえないと聞きたくなるのがセリフ。でもそれも演出なのかな。二人は生き返って本当によかったなあ。

近畿大学付属「サマータイム・ドリーマー」

卒業式。校長が式辞を述べる。次に「旅立ちの日に」を1人で歌い出す。メロディーが崩れていく。面白すぎる。そう、こうやって人は夢の中に入っていくのですね。と言ってもそれは後から振り返ってわかったことでしたが。このようにこの作品には後からわかるキーワードや人物が随所に散りばめられています。それをひとつ一つ、そうかそうか、そういうことだったか、と謎解きを楽しむように観ていました。まさに想像力をかき立てる舞台。自分たちの卒業式なのに、その最中に寝てしまうという発想がいいではありませんか。しかも夢の共有！そこで現実ではこれまで言えなかったことを言い、本当の友情を確認し合う・・・でもここで語られる友情なら、現実でも示せたのではないか、とも思いました。「夢の共有」という発想が先に生まれたのなら、そこに入れ込む題材はもう少し大胆でもよかったのではないのでしょうか。いやいや、最後の最後の卒業式まで友達でいながら本当のことを語れない切実な人間関係の吐露とも言えるのかも。「おっさん」と呼ばれたくない現役男子高校生霊媒師マコトとアキの彼氏ソラが出てきたところから話はがぜん面白くなり、教室卓球でマコトがネットをやらされ、そしてソラの正体は夢猿だった。もうまさに夢の世界。飛んでいる。しかも「夢猿」の説明は全くない・・・ここまでやったら最後はどうしてもまとめてしまった、という感が否めないのです。でも、話が卒業式に戻らないって言うのも、やっぱり飛んでる作品なのです。セリフにかかる音楽が大きいです。勇気をもってボリュームダウン。

河野桃子先生

1. 鶴見商業高校「空色。」

好き、という気持ちはとても複雑で、苦しいのに好き、とか、好きじゃないはずなのに手放せない、とか、自分で自分の気持ちを持って余してしまうことがあります。”そら”というひとりの女の子の閉じた気持ちを、1冊のボロボロになってしまった本とともに紡いでいく優しい物語でした。全編を通してただよう優しさは、戯曲のト書きからも感じられます。

全体的に、やりたいことが伝わる丁寧な舞台でした。そらが抱えているものが観客にわかるまでには時間がかかりますが、登場人物それぞれから見たそら像が語られるので、客席にいて、置いていかれることも飽きることもありませんでした。何度か回想シーンがありますが、音響と照明がすべて消えずに時間の経過を表現した場面では、「過去の出来事はずっと地続きのことなんだ」と、そらの苦しみが今も終わっていないことが表現されていました。

中心で成長していく林田秀実さん演じるそらと家族の少ない会話から、その関係が見えてくるようすが面白かったです。姉・楓（寺前伊都さん）は、きっと年上として幼い家族を支え続けてきただろうなという安定感が、話し方や動きにありました。また、弟・ふぶき役の糺谷椎太さんの演技は、家族が過ごしてきた時間の流れや関係性を想像させてくれました。たとえば、姉を手伝おうとみずから洗濯物をたたむけれどもそれほど上手にたためていないことや、文句をいいながらも正座を崩さないこと。そんなふうに行儀よく正座する一方で、幼稚園児時代を演じる時は足を投げ出して座ったりと現代とのギャップがあって、この家族の時間の経過を感じられました。セリフだけでなくたたくまいによって「この人はこういう人なのかもな」と想像を膨らませられることは、その人に直接出会ったような楽しさがありました。

クラスの3人組（古庄杏子さん、廣橋褒香さん、池内夢月さん）は、会話のテンポがよく、出てくると舞台上が華やかになってよかったです。3人それぞれそらに感じている気持ちが少しずつ違うような会話があったことも、3人の人間関係が垣間見えて面白かったです。性格の違いがしぐさなどで演じられていましたが、もっとハッキリ役割や考え方を区別すると、クラスの雰囲気にも厚みが出たかなと思います。たとえば、「口にはしないけど、そらが苦手」とか「そらのことは悪く思っていないけど友達のおとには強く言えない」とか、考え方がバラバラなうえで3人の関係性が見えると、もう少し群像劇の色合いがでてきて、教室のなかにいろんな色が感じられると思います。すると「そんないろんな色のなかでそらの色はなに色だろう？」という見え方ができるかもしれません。もしくは、逆に3人の一体感をもっと強調して、一緒になってそらに強く当たるようにすると、そらと3人組とはなの構図がハッキリしてそらの孤独と個性を立たせることもできるかなとも思います。

ほかに、教室でのそらの様子を引き立たせるためには、美術の使い方でも工夫ができそうです。たとえば、席の配置や掃除の担当分けによって物理的な距離を演出することで、3人とそらの距離感を視覚的に印象づける……など。

また1冊の本という大切なモチーフがあるので、最後にその本を綺麗に修復するとか、ひながなにかひとつ手を加えるとか、または本編でひながくれたもう1冊の本と並べて宝物として並べる象徴的なシーンつくるといふふうに、本という素敵な小道具に変化を持たせると、それがそらの変化と重なって見え、作品の手触りに厚みが出たかもしれません。

ラストは、ずっと客席に背を向けていた母親がいた位置に家族写真が置かれていたシーンが、とても優しくて良かったです。写真に照明が当たり、少しだけ光っていたのがとても印象的で、温かい気持ちで舞台を観終えました。

2. 工芸高校「未来へ」

冒頭、ぐっと惹きつけられました。音楽での入りが良く、さらに、旧校舎の窓からみはるが入ってくるシーン。「いったいなにが始まるんだろう!？」という緊張感とワクワクで、思わず息を止めてしまいました。旧校舎の窓のガムテープ。うまく開かない窓。差し込む陽の光。そのように細かい描写が、広い舞台に対してたった2人の芝居でも密度を作っていたと思います。

60分の2人芝居というとても体力のいることを、集中力がきれることなく走り続けた出演者2人。高校生の子野歩美を演じた3年生の前川由莉亜さんは、しっかり相手役を見て反応しようとしており、受け止めようとするその姿勢は、クラスメイトとの関係が受け身がちな歩美ともうまく重なっていました。動きが時に機敏でキレが良く、繊細な仕草や反応を丁寧に返して、「もっとじっくり見ていたい」と思う瞬間が何度かありました。また、28歳の天野みはるを演じる1年生の長南朱璃さんは、客席へと向かって大きく動く演技が力強く、広い空間に躍動感を持たせていました。2人の演技の質が違うことで、みはるが「未来から来た」とウソをついているのではなく「ほんとに未来から来たのかも？」という思いがよぎることも楽しめました。

ずっと2人の会話だけで展開や関係性の変化を見せていくのは難しいですが、照明や音響をいろいろと工夫していたことで、変化がでていました。

照明は、とくに冒頭シーンで美術とともにふと見せる教室の美しさや、中盤以降の歩美の心情表現の照明の変化など、はっと魅せられる瞬間がありました。また、照明位置をさまざまに工夫していたことで、舞台に高さや奥行きが出ていました。

音響は操作が丁寧で、俳優や舞台上の空気感を邪魔しないように優しくフェードインするなどの繊細さが良かったです。扉を開けた時にSEがない時とある時があり、その演出意図が読み切れなかったことと、時には照明や音響に役者が合わせているような”待ち時間”は少し気になりましたが、照明も音響も、俳優と同じく「舞台を構成する登場人物の一員」であったことで、2人芝居だけれど賑やかさがありました。もしさらになにか工夫ができるとしたら、照明や音響が繊細に変化していくシーンと、大胆にパッと変化するシーンとのメリハリをつけると、インパクトがあって観客の心をダイレクトに掴めたかもしれません。同じように、演技の演出についても、2人の距離がゆっくり縮まっていくよりも、ある瞬間にぐっと縮まる方が、2人の関係の変化を表現しやすくなると思います。

タイトルにもある「未来」という言葉は、タイムトラベラーというファンタジー的な意味と、2人のリアルな将来のことの両方の意味にとれます。この言葉をタイトルにしたことには、前向きな意志を感じました。

開始10分ほどで「ミライ」というセリフが出てくることで、早い段階でテーマが伝わってきます。せつかなのでラストシーンにもうひとつ「“未来”ってそういうことか!」という発見があると、より目の前が開ける感覚が生まれたかもしれません。たとえば「(未来へ) 共に行こう」「〇〇で会おう」「あの場所で待ってる」などの未来を予感させるセリフのあとに実際にその未来が描かれるので、その時に過去の2人と未来の2人の立ち位置や姿勢を同じにして重ねることで、時空が飛んだような演劇ならではの表現をすることもできるかなと思います。

タイトルにもうひとつひねりあっていいかもしれないと思う一方で、ストレートなタイトルで未来を明るくハッキリ描くという姿勢に好感が持てます。観ていて前向きで心地よい気持ちになれる素敵な作品でした。

3. りんくう翔南高校「紅回廊の恋」

ファンタジーでしかも世界が交差するという世界観を、ほぼ Horizont と幕だけで表現していました。

バックライトでシルエットを浮かたせたりと、幕の下から足が出ていたり、劇場にあるもので変化やインパクトをうんでいたのは面白かったです。2つの世界・独自の世界観・過去と未来などが絡まっているのを表現するのは難しいと思いますが、劇場にあるものをどう使うか、という工夫を重ねていました。

本作は、リアルな現実（ミステリ研究部）と、ファンタジーの異世界（ウィースラント）が行き来します。ウィースラントという独特の世界設定については、少しずつ情報を出していくことで、観客がついていけるようになっていました。また、登場人物が多いので誰が誰なのかわかるのに時間がかかってしまうところを、立ち止まって考える暇を与えずにどんどん展開させていく勢いがありました。

知らない世界観の作品を観る時は「これはどういう作品なんだろう？」と観客もかまえてしまうと思うのですが、まず現実の場面でミステリ研究部や生徒会3人にコメディ要素があったことで「楽しい作品なんだな」という雰囲気が出ました。それにより、客席での居心地がよくなったのが良かったです。研究部員たちのやりとりは生き生きしていて、生徒会との対立はそれだけで学園ファンタジーが始まるようなわくわく感がありました。生徒会長兼夢魔（神田川／ムーマ）役の市原健臣さんに勢いがあり、ファンタジーという設定にぴったり。思いきりが良い演技で、その世界観に説得力を持たせていました。

さまざまな登場人物に背景があるので“群像劇”として表現しても良いのですが、タイトルから“恋”がひとつのテーマなのかなと予想できるので、恋物語を軸にするという選択をしてもよかったかもしれません。その場合、現在の演出のうえで、2人が中心になるように立ち位置などを工夫することでぐっと物語の印象を変えることもできます。ナツミ（サーシャ）役の田代明日香さんと、大城（アルカード）役の福山陽大さんに爽やかさがあり、雰囲気が合っているなので、恋に落ちる2人をもっと前面に出してもファンタジーの世界観と合うかなと想像しました。

余裕があれば、もう少し小道具が加わると、セリフだけでなく視覚にも刺激があり、物語への理解がぐっと深まったのではないかなと想像します。コロナ禍での準備は大変だったでしょうから、身近にあるもの（ハンカチや紐や靴下などなんでもいいです）を身に着けて世界が移動したことを表現するなどの方法もありえたかもしれません。また、過去と未来、現実とファンタジーなど、時空が変わっても立ち位置や照明・音響効果を同じくして視覚的にダブらせる演出にするなどによって、演劇ならではのわかりやすい表現ができる可能性があるかと思います。

とはいえ出演者の方々の力強さにより、シンプルな舞台でも物語世界が広がっていきました。むしろ、美術や小道具が最小限だからこそ、観客が思い思いのファンタジー世界を想像できるという楽しみもありました。

美術の助けがないなか、出演者の方々の力で、よくこの特別な世界観を演劇にしていたなと感嘆します。とくに殺陣などの難しいシーンも、生身の俳優の力で、物語を引っ張っていました。それぞれの熱演により、実際には見えていないものを想像できるという演劇の楽しみのひとつを、味わわせていただけた作品でした。

4. 追手門学院大手前高校「合法演劇」

作りこまれた強固な世界感と、そのなかでエネルギッシュに動き回る、脆い登場人物たち。圧倒的な魅力と力強さがありました。

幕が開いた瞬間からインパクトがあり、ビジュアルと勢いで一気に劇場を自分達の空気にしました。本人達が役を演じているという前提をあきらかにし、「これは演劇です」と“合法的に”演劇をスタートさせる冒頭。音楽と早口とマイクの反響でセリフが聞き取れなかったのは残念でしたが、それでも勢いがあ

り、引き込まれるには十分でした。

舞台上には、区切られた演劇部部室が中央に、その脇のなにもない空間が教室（部室外）という設定で、つねにすべての俳優が舞台上に続けることで、より演劇部室が「隔離された空間」だということが際立ちます。しかも、部室と呼ぶには異質な舞台美術で、同じ空間のなかにある“合法地帯”だということが一見してわかる美術が力強かったです。しかもその合法地帯は、散らかっており、汚れたり壊れたりしており、その不安定だけれども守られた自由は、“演劇”というものの象徴でもあるようでした。

世界観がはっきりしていて、キャラクターの役割が明確なので、5人でひとりの人間の内面のようにもあります。そのうえで出演者たちが思い切りよく演じていて、全員が魅力的に見えました。セリフがないシーンでもキャラクターを崩すことなく、かつ、いま誰が目立つか、誰の近くににいるか、など立ち位置も意図的でした。衣装は統一感があるうえで色やジャンルに違いがあり、美術・衣装・俳優のバランスがより人物を魅力的に見せていました。

演説子役の林舞菜さんは集中力と勢いが衰えることなく、展開をぐいぐいと進めていきました。早口カタリ役がしっかりしていないと物語がうすっぺらくなりそうですが、演じる松原風佳さんが明確に意図を持って主張をしていたので、作品全体がどっしりしたと思います。自己陶醉役の宮崎愛月さんは、難しい役。けれども軽さと切実さのバランスがよく、クライマックスの行動を納得させる説得力のあるたたずまいでした。尖杉奏役の森咲樹さんは、周囲を受け止めて返す演技が共感しやすく、作品の芯になっていました。唯一、現役演劇部員ではない快樂絶対役。山田岳功さんの飄々とした存在感とセリフは、どんな役でも演じられそうな懐の深さがありました。

俳優、美術、照明、音響、衣装、小道具……細部にこだわりが見えて、全体に統一感がありました。壁のちょっとした黄ばみ、スカートの重ね履き、早口さんが倒れた時にライトが消えるタイミングなど、ものが多いにもかかわらず無駄を感じるものがなく、劇作の赤井野々華さんと演出の中田翔愛さんはかなり細かなところまで練られたのではないかと思います。とくに演説子だけが、袖にハケるのではなく舞台（演劇）から去っていった演出はとても良かったです。

これほど力強い作品をつくることができるので、せつかくの残り15分でもっと先までいけたのではないかと思います。可能性はいろいろとあるでしょうが、たとえば、物語においてそれぞれの関係性の揺れ動きに厚みを出すとか、追手門学院大手前高校演劇部のメンバーが演じていることにもうひとつ意味を持たせて冒頭を回収するとか、描いた現状のもう一步踏み込んだ先にはどんな景色があるのかとか……。いずれにせよもっと深く突っ込んで書いたものを見てみたい、と思わせる魅力がありました。そして、観客が作品を受け取り、「こういう可能性があるかもしれない」「この先どうなるんだろう」と想像させる楽しみを持てる強度の作品でした。

とても魅力とパワーあふれる演劇であり、良いチームでした。もしこのメンバーによる演劇上演があるなら、自分でチケットを買って足を運びたい。素晴らしかったです。

5. 東百舌鳥高校「びえんからのぱおん ～コロナなんかぶっ飛ばせ～」

最初、音楽で一気に引きこまれました。フェイスシールドと「ソーシャルディスタンス！」というセリフで、はやいうちに時代背景がわかったのも安心できました。時事ネタがたくさんあることも興味を引きますし、それを少人数（3人）で上演するという意欲的な作品でした。

ほとんどのシーンがAとB2人で、舞台美術もなく、しかも短い会話の応酬なので、俳優の力がとても必

要だったと思います。しかしA役の須藤優月さんと、B役の浅野梨桜さんが、互いをフォローし支え合おうとしていて、2人の力で芝居を作っていました。それぞれ言葉に力があり、広い空間に2人だけにも関わらず、存在感がありました。

そこに亡霊が登場し、2人だけの空気に変化がうまれます。とくに亡霊がかなり元気でコミカルなこともあり、2人から3人になってから作品全体に動きがうまれ、引き寄せられました。物語がどんどんと加速していきます。

この亡霊、当日パンフレットに「亡霊」と書かれていますが、本当に彼が亡霊なのか、亡霊のフリをした人間かもしれないという可能性を残しながら会話は進んでいきます。しかも亡霊役の山崎雅さんに力強さがあり、AとBが「ほんとうに幽霊？」との疑問を優先させれずに勢いに吞まれていくことに、説得力がありました。2人が釈然としないながらも亡霊を受け入れていくという、受け手の演技によっても、亡霊に存在感を与えていました。亡霊の正体がわからないまま話が進むことで、想像力を刺激し、物語の展開を読めなくさせていて良かったです。

いつの間にか「演劇とはなにか」という話題について語る3人。それにより、亡霊はなぜコロナのことを知っているのか？なぜマスクをつけているのか？現代なのか、過去なのか、現実なのか、演劇（虚構）なのか……3人がいる場所がわからなくなりながらも、物語の展開に引き寄せられていく状態は、演劇という不可思議なパンドラの箱をあけてしまったかのようでした。この“わからないけど納得感があること”は、演劇の醍醐味のひとつだと思います。

ほぼ会話で展開するので、場面によってはなにか小道具や立ち位置に変化があると、メリハリがきいて作品のインパクトが強まったかなと思います。

たとえば、泥棒のシーンと部室のシーンは、舞台上における立ち位置を変えたり、部室のシーンは黒板（ホワイトボード）前にするなど身近にあるものを設置したりすることで、視覚的に場面展開を理解することができます。さまざまな雑学が散りばめられているので、思い切って紙芝居で説明をするなどの変化があっても楽しいかもしれません。また、亡霊のマスクは通常マスクと違ったデザインにするなどで、3人の関係性を視覚的に表現できる可能性もあります。なにか小道具があることで俳優も動きやすくなり、より芝居に勢いが増すのではないかなと思いました。

全体的には、タイトルからして意欲的でワクワク感がありました。時事ネタや歴史ネタに、思わず笑ってしまったり、頷いたり……。演劇愛があり、演劇のいろいろな面白さに挑戦した作品でした。

6. 信太高校「たまゆら」

2020年文化祭前のある高校が舞台。文化祭用の台本でもあったとのことで、リアリティをもって稽古に臨まれたのではないのでしょうか。と思うほど、自然な佇まいで舞台上に立っているように感じました。

それぞれのキャラクターが魅力的で、とくに冒頭から登場する男子高校生2人のおしゃべりを見ているだけで楽しかったです。「モテたいやろ」「まあ、そやな」と、だらだらとうだつのあがらないやりとり。愚痴っぽくありながらも、なんだかんだ楽しそうな様子に、なんだかこの2人のことを好きになってしまいます。けだるそうななかに優しさが見え隠れする大山役の大川誠陽さん、素直で時にはデリカシーがないのにちょっとしたしぐさが繊細な中川役の中山裕欄さん。2人の魅力もさることながら、一番素敵だったのはコントシーンです。なぜ即興コントがそんなにクオリティ高いの？と思うほどテンポよく、なにより2人が楽しそうでイキイキしていました。劇場全体の空気が温まって、客席からも笑いが起き、私自身もよく笑いました。

そんな2人の世界に登場するのが、同じクラスの新井さん。宇宙人と交信しようとする不思議な女子高

生ですが、その真摯さが、彼女になにか苦しいことがあるのかもしれないという背景を感じさせます。少し無理をしているような明るさは、「宇宙人と交信する」というちょっと突飛な行動にも説得力を持たせていました。ただ、その真面目さゆえ、「一人でも多く女子と話したい!」と言っていた男子2人を引かせるのであれば、もっとわかりやすく怪しい道具を持っているとか、変な髪型をしているとか、一見してビックリするような小道具や衣装をもちいてもいいのかなと思いました。

男子高校生・中川が憧れる池園さんは、演じる池田美優さんの姿勢がよくセリフも丁寧で、しかもずっとマスクをつけたままなことで想像力をかきたてて良かったです。片岡役の片山空美さんが、公園に集まる高校生のなかで一人独特の雰囲気をもっていて、今作の重しになっていました。

それぞれのキャラクターがしっかりしていたからこそ、公園以外にいる時間が想像できるとより人物にも作品にも厚みが出たと思います。なぜこの公園にこんなにもみんなが集まるのか、それぞれ学校ではどんな会話をしているのか、作中の時間の流れのなかで公園で過ごす時間以外の関係に変化はあったのかなどが想像できると、観客にとっても身近な人達のように感じられるでしょう。

それについては、小道具や衣装でもサポートできたかと思います。制服でそれぞれの変化をつけていましたが、たとえば、なにかのキャラクターで統一されたキーホルダーをつけることでなにかにハマりやすい性格を表現したり、文化祭の小道具（ポスターの材料とか、浮かれたコントの小道具）を持つことで文化祭への意欲の差を感じさせたりと、持ち物にその人物らしさを持たせる方法もあります。ほか、マスクを着けている人と着けていない人だけでなく、布マスクか不織物マスクかを変えたり、あごに引っかけることで「いちおうルールは守るけど適当な人／コロナに対してはあまりこだわらない人」という考え方を垣間見せたり、マスクのデザインをアレンジしていることで本人のこだわりの強さを表現したり……コロナに対する意識の違いを見せると、現代性やリアリティも増すと思います。

また、夕方の公園に集まってくるコロナ禍の高校生のけだるさの空気感がよかったです。そこにさらに音響で、ト書きの「蝉の声」以外のシーンでもかすかに蝉の声が流れ続けているなど、その空間の背景をさらに作り込むと、観客はもっと作品の世界に没入しやすくなるでしょう。

ここまで例にあげたように、脚本に書かれている以上の情報で、物や状況を彩っていくことができれば、より生き生きして見えるかとは思いますが、けれどもすでにそれぞれの演技や佇まいが自然体で、魅力的でした。登場人物（俳優）が魅力的だったからこそ、ほっとするような、優しい気持ちになる、居心地の良い作品でした。

7. 豊島高校「あめふりこぞう」

全体的にとっても充実していて、満足感の高い作品でした。

まずダンスで一気に引きこみ、「昨日の『8時だよ全員集合!』、見た?」で時代設定を観客に伝え、最終的には時代が古いことにも意味のあるラストに繋げていて、とてもバランスが良いです。手塚治虫さんの原作の力もあるでしょうけれど、それをうまく60分の構成にしていました。

さらに物語を表現する俳優、美術、衣装、音響、照明、小道具……どこにも気配りがされていました。

はじめに目に入る美術。パネルが半透明なことが効果的で、照明が下からパネルに当たることで、ステージ全体の色合いが変化し、空間の高さや奥行きがうまれていました。それによって、客席へも物語のイメージが浸透していくようでした。

そして小道具と衣装。雨降り小僧の傘のボロボロ具合は、みすばらしくなりすぎず愛しくなります。3妖怪もまったく違うキャラクターを引き立たせる衣装に振り切っていて、キャラクターを引き立たせていました。小学生たちの靴下や、傘なども、それぞれ個性が出ていました。

登場人物が多いなか、俳優はいずれも配役が良かったです。子ども時代の翔太（中野聖香さん）は、いじめられっ子だけど強気で芯があるので、応援したくなる主人公。もうひとりの主人公である後谷佳奈さん演じる雨降り小僧は、健気で、こちらも応援したくなる、願いを叶えてあげたくになります。この2人のバランスが良く、タイプが異なるのに息が合っていることで、人間と妖怪という異質だけど友達であることの新鮮さと納得感がありました。

いじめっ子3人が楽しいです。憎たらしくもありますが、素直でコミカルなので陰惨さがあまりなく、物語全体が好ましい雰囲気になっていました。いじめのリーダー・あけみ（中越乃愛さん）に可愛げがあり、子分的なまこと（足立麟哉さん）とたかし（岡本宙さん）がちょっとしたしぐさに工夫があったりと、生き生きとしていたことで小学生らしさがありました。

3妖怪は、この作品の世界観を左右するかなり重要なキャラクターですが、それぞれが違うタイプで、出てきただけで楽しかったです。アマビエ（草野星空さん）は柔らかい色合いの衣装に加わり、ふとしたしぐさにも色気がありました。小豆洗い（横井優輝さん）は見た目インパクトと、それに飲み込まれない丁寧な演技のギャップで魅力的な人物（人ではないけれど…）になっていました。大人な2人の妖怪の間でおたおたとする豆腐小僧（佐原里奈さん）がとてもかわいらしく、一生懸命で、目で追ってしまいます。「いろんな妖怪がいるんだな。妖怪っていいな」と思えたことで、妖怪というファンタジーな設定が好ましく受け入れられましたし、みんな幸せになってほしいなど、物語に気持ちが入っていました。

そして配役について、一人2役を演じていたことが良かったです。父親と成長した翔太を同じく寺師英雅さんが演じていたことで、時間の流れが繋がっていきました。またとくに、最後のかえで役を後谷さんが演じていたことがとても効果的でした。自慢げに赤い長靴を掲げたシーンには胸がいっぱいになりました。しかもその長靴が、あきらかに翔太の長靴よりも赤く、新しく、輝いていたこと。そのことで、褪せた子どもの頃の思い出が一気に鮮明で輝かしい現実になって過去から飛び込んできたようでした。

どの場面もとても充実していたからこそ、逆に全体のメリハリが薄くなってしまった印象もありました。たとえば、場面転換に変化をつけたり、思いきり音量をあげたり、回想シーンの展開の仕方を入れ替えたり、途中にもダンスを入れたり、もっと大胆に冒険するシーンがあっても良かったかもしれません。「わっ、なんだ!？」と思う瞬間があると、お客さんとの関係に変化が生まれ、より引きこまれたかなとは思いますが、しかし、とにかく満足度が高く、楽しい作品でした。

8. 追手門学院高校「学校へ行こう」

3年生を中心に、それぞれの得意なことや魅力を舞台にのせ、創作台本の強みを生かしたエンターテイメントあふれる舞台でした。全体的に統一感があり、作品のルールがしっかりしていて、演出の影響が強いですが、そこで型にはまって窮屈にならなかったのは、それぞれの出演者が自分なりに楽しんだり工夫が見られたからだと思います。

冒頭は、それぞれが衣装の色が違ってもいい、みんな同じ姿勢で座り、テンポのそろった動きで、個性があまり感じられませんでした。出演者が多く、舞台美術がないことで、人が美術のように見える美しさと一体感には圧倒されましたが、それは「高校生」というひとつのまとまりにも見えました。けれども、それぞれの”理想の人生”が語られていくうちに、ようすが変わってきました。

台本に役名のある9名を中心に、それぞれの妄想エピソードは予想外に発展し、しかもどれも明るくて、夢を聞いている楽しさが何倍にもふくれあがって伝わってきました。一番目の「おかちの場合」で、インフルエンサーになりたいという現代的な夢と、映像とスマホアプリの演出は目を惹きましたし、それが結婚して幸せな家族を作りたいという身近な夢として落ち着くのも、おかちの人間性を表していてよかった

です。同じように、女優という、これまた演劇部にとって身近な夢があり、そのエピソードも具体的で、15分で女優のサクセスストーリーを観ているのも楽しかったです。かと思えば、古植物の研究者というまったく別ジャンルの夢が語られたり、真逆のなんだかふわっとした具体的でない男子の妄想が語られたりと、そのエピソードの並びもバランスよく構成されていました。

この妄想エピソードはひとり約15分ずつと大きな差がなく、全体的にルールがかっちりしています。また、音楽が流れ続けているシーンが多く、勢いが途切れることもなく、常にかんりのスピードで観客も一緒に疾走している印象でした。4名の妄想エピソードを紹介するので、雰囲気やテンポをガラリと変えてメリハリをつけるという演出方法もありえるとは思いますが、けれども、ずっと勢いよく進んでいったことで、「もしかすると今のオンラインによる“学校生活”はこのような、ずっと画面のなかで同じようなスピードで押し流されていくようなものなのかもしれない。だとしたら少し寂しくもあるけれど、それでもこれほど励まし合えるクラスメイトがいることは希望でもあるな……」などと、物語を越えたことまで想像を巡らせられたことは、これもまた演劇の面白みでもありました。

疾走の勢いがずっと続くため、ともすれば飽きそうな気もします。けれども、そうさせない出演者たちのエネルギーと工夫がありました。メインではない役まで、その個性の違いが、エピソードや会話だけでなく、舞台上にいる生身の出演者のたたずまいから見えてきたことが、今作のなによりの魅力でした。名前のない役、一瞬しか出ない役でも、小道具を変えたり、しぐさを変えたり、さまざまなこだわりが見えました。舞台美術も衣装の変化もないにも関わらず、舞台のどこを見ても新鮮さや発見があり、楽しかったです。

もちろん、個々の能力の高さもあります。得意なダンスや歌にもそれぞれジャンルがあり、バレエ、ラップなどいろんなパフォーマンスを楽しめました。技術力の高さを強調するのではなく、俳優の演技と愛嬌で笑いを生んでいたことで、より引き込まれました。肺魚役など演劇ならではの力技もあり、観客の心をわしづかみにしたのも納得です。それぞれの得意な個性と、役と、演じる工夫と、楽しそうなようすが合わさり、作品を鮮やかにしていました。

技術があるだけでなくそれぞれの意志や意欲が感じられ、守りに入らず攻めの勢いに巻き込まれた時間。「ナマのエネルギーを浴びたなあ！」という舞台ならではの体感があり、映像ではない、人がそこにいたからこそ過ごせた時間でした。

9. 東海大学付属大阪仰星高校「生きていたんだよな」

まず幕開けで一気に引きずり込まれました！音楽と照明によって一気に観客の集中を集めるインパクトがありました。音量がかなり大きく、けれどもセリフがないので、これくらい思いきりがある冒頭には観客を巻き込む力がありました。

音楽の存在感が強く、照明もギリギリまで暗くしたりと、それぞれの操作・効果が大胆で独自の作品となっていました。とくに音楽の力は全体的に強く、音量を大きくしていたり、日本語の歌詞のあるものが多様されていたりとかかなり雄弁で、途中にはその音楽にセリフがかき消されてしまうシーンもありましたが、それに呑まれない3人の熱演でした。かなりの体力と集中力がいると思いますが、出演者の力強さで60分を引っ張っていきました。

なにより、3人のキャストで何役も演じるという、演劇、演じることの面白さがあります。出演者3名が役ごとにさまざまな工夫をしていて、とくに教頭先生や祖父や母などの年齢幅があることの違いだけでなく、その人物の強さや弱さなどの人間性にも注目し、演じ分けられていました。加えらるとしたら、生徒同士の同世代での会話と、大人と生徒が話すなど年齢差がある時の会話とで、身体的な距離感を変えるなど、個人の演技だけでなく関係性によっても変化が見えると、その場の空気感が変わり、シーンに幅が出

るかなと思います。

矢城優哉さんが演じた男子高校生・タカシは、具体的になにがあったかを言わないまでも、鬱屈を抱えていることがよく伝わりました。「死ね」と悪態をつく様子も、本人の繊細な窮屈さが感じられました。また、「女はやさしくないとアカンやろ」「変な名前(笑)」など、少し前時代的な固定観念にとらわれている発言が素直に出てくることで、自分で自分をがんじがらめにしているようにも感じられ、ただの被害者ではないゆがみなども表現されていて、人間らしく魅力的でした。

そのタカシと、微妙に価値観がかみあっているテンコが実は過去の人だ、ということにとても納得感があります。演じる廣田葉月さんの、丁寧な話し方やしぐさや落ち着きも、現代的な女子高生というより、戦争の時代を生きて、ずっと一途に旗を振り続けてきた人の芯の強さを感じました。

その2人が、現代を生きるユミを精神的に追い詰めていく教頭先生や家族を2役・3役で演じているという配役の構成も面白かったです。ユミ役の野村皐羽さんは、さまざまな方向から責められるシーンを引き受けていましたが、芯の強さと存在感で、つらい状況にも痛々しくなりすぎず、応援したくなるユミを好演していました。

全シーンを丁寧に演じられていましたが、すべてをきっちり演じなくても届けられるほどの力強さが3人にはありました。時には力を抜いたり、作品のテーマにかかわるような大事なセリフを立たせる静かなシーンがあるなど、ゆったりした時間があってもメリハリがきいたかと思います。

ラスト、それぞれが新たな選択をしつつも、根本的には同じ人間だし解決もしておらず、でも、少しだけ前がひらけたような気持ちになる、そのバランスが良かったです。前に踏み出した、けれどももしかしたらまた同じ苦しみに戻ってしまうかもしれない。だからこそ、彼らを応援したくなりました。

10. 近畿大学附属高校「サマータイム・ドリーマー」

大きな不思議、小さな不思議が上手く散りばめられていて、充実した世界感でした。”夢と現実がわからなくなる” ”時間を何度も繰り返す” という、どちらかひとつだけでも物語になりそうな要素がバランスよく組み合わせられていて、「どういうことだろう？」と興味を引きます。

中心となる3人の会話もどんどん話題が変わるので、おしゃべりを聞いているだけでも楽しいです。「あれ？」と疑問を持ちそうなセリフも伏線としてちゃんと回収されていました。チサだけブレザーなこと、しつこいくらいのスイパラ愛やその値段感など、どれもが後半の展開に繋がっていたり、ギャグとして展開にメリハリをつけていたり、あまり意味のないセリフがなく、丁寧に書かれた台本だなと思いました。

この、短期的な楽しみ（目の前で起きていることの面白さ）と、長期的な楽しみ（なぜタイムリープしているの？という謎）という、2種類の楽しさが同時に存在していたことも良かったです。「次になにが起こるんだろう？」と楽しい時間を過ごしているうちに、少しずつ物語がうねりながら進んでいく……という、よくできた構成でした。

また、”夢のなか”だからこそ、アキとリエのコミカルなやりとりや、マコトの特異なキャラクターが受け入れられました。しかも、マコトが最初に登場することで、（これくらい振り切った芝居が始まりますよ）という雰囲気は劇場に伝わり、はやくから客席があたたまったのも、良い導入でした。冒頭で空気を作ったマコト役の秦雅純さんは遅く、その後も、歌ったり霊媒について語るシーンにも力がありました。

チサ役の光永莉子さんは、周囲の話に耳を傾けることと、展開についていけない戸惑いのバランスがよく、感情移入しやすく、一緒になって不思議な世界に迷い込んでしまいました。アキ役は、葛藤するがゆえの明るさを妹塚夕芽さんが熱演し、夢の世界がうまれた納得力を持たせていました。その2人の隣で、リエ役の大東美晴さんの安定感があつたからこそ、ここが夢か現実かわからない世界感が強くなっていた

と思います。女子3人組なので、3人で会話するときと、2人ずつで会話するとき、それぞれ関係性の変化が見えると深みが出て面白いのですが、すべて「夢かも？」という設定が作品の説得力を支えています。

ソラ役の原口歩工さんはたたずまいがよく、登場シーンまでに「女子に興味がないって噂でガードが固く、アキの好みの顔」というイメージが語られているうえで登場し、そのイメージとは逆のキャラクターをすんなりと馴染ませていました。その後のラブラブなやりとりや、人間の身体をネットに見たてての卓球など、軽快にデフォルメされていて楽しかったです。

照明、音響も独特な空気感を作っていました。『蛍の光』で幕開けから状況をつくったあと、薄暗い教室にうかぶ照明が、不思議な雰囲気をつねに漂わせていました。ずっとそのシーンが続くかと思いきや、場面転換には電車のSEと演出にドキドキさせられました。だからこそ、夢の謎がわかったり、夢から覚めるシーンなどはもっとドラマティックな演出にすると、物語の吸引力が増すだろうと思います。

どうなるのかなとハラハラ楽しんだ最後、夢の世界に迷い込んだファンタジーから一転、3人それぞれの悩みや背景が吐露され、急に現実に引き寄せられた……と思いきや、現実の世界は卒業式の真っ最中のはず。結局、チサは、夢から覚めて前向きに歩き出したのか？それともまだ夢の中にいるのか？……どこまでが夢でどこからが現実なんだろうと、観終わったあとも想像を膨らませ、夢と現実の狭間を楽しむことができたのは、夢のような演劇の世界に引き込まれていたからでしょう。

虎本剛先生

①大阪市立鶴見商業高等学校「空色。」

この作品は「心に傷を追った少女・そらが、ひなと出会うことによって一步を踏み出していく物語」です。そんな彼女の等身大で前を向けない苦悩が丁寧かつ繊細に描かれていました。それ故に「ひなが頑張る」より、もっと「そらが頑張る」シーンが全編にあればよかったですと思います。終盤に音楽に乗ってスピーディーに表現されてはいるのですが、もっとじっくり具体的な彼女の「行動」や「台詞」にして、その変化や努力を序盤から観たかったです。「主人公は作中、誰よりも悩み行動してほしい」と僕は思っています。そして彼女の気持ちが変わる瞬間にそれに沿った音楽や照明があるとさらに印象が強く、観客も彼女の気持ちになって物語を味わえ、作品にもメリハリが利くようになると思います。彼女の過去回想シーンにも心情を表す音楽があるとより印象に残ったと思います。

教室と家庭を交互に描く作品であるため、中割りの幕を使って場面転換するのはいい手法だと思いました。ただその結果、教室シーンの机が全体的に後方になり舞台空間が広くなりすぎていました。そして幕の開閉時間により空白の間が生まれていました。こうした場合は幕の開閉時間に何かしらの音響効果を入れ、その前シーンの空気感を引っ張ったまま転換したほうが良いと思います。無音転換は客席を現実世界に引き戻してしまいます。場面転換を考えるのは演出家の腕の見せ所。よりスムーズな方法は無いのか、空間をうまく使う方法はないか、検討してみてください。

また、過去の事故シーンが具体的に何が起きたのか（土砂崩れ？）が分かりづらかったです。いっそ全て見せずに、暗転と分かりやすい効果音のみにして「何かが母達に起きた…!？」と客席に想像させたほうが良かったのではないかと思います。直接見せずに、観客の想像力を刺激するのも効果的な演出方法の一つです。

この作品、そして皆さんの素晴らしい所は誠実さとトータルバランス力にあると僕は分析しています。主人公やひなだけでなく、同級生や姉や弟の熟演もとても印象に残りました。そして人の死や心の傷を扱う作品に対し、皆で真摯に取り組んでおられたのがとても好印象でした。これからも皆で誠実に向き合った、よりよい創作を期待しております。

②大阪市立工芸高等学校「未来へ」

この作品の素晴らしい所は2人芝居の、それもほぼ会話だけでそれぞれの葛藤と成長を描いている所にあります。それ故に外から見ている人間＝演出家ももっと会話のメリハリをつけていくことで、物語にさらに深みを生み出せると思いました。というのも丁寧にセリフ展開され過ぎている為に、同じテンポで会話が続いているように感じてしまったのです。リズムよく進んでいく所、反対に言いよどみ沈黙が生まれてしまう所などを意図的に作ってみてください。その為には演出が「このシーンは、誰の、何を、見せたいのか？」という狙いをしっかり持つておく必要があります。その狙いがハッキリすれば自ずと音響や照明も「誰の、何をj見せるためのものか」がハッキリして、調和がとれたシーンになります。

そして僕が特にいいな！と思ったのはラストの歩美のスピーチです。このパワー、この情熱がこの作品の一番のピークだと思います。音楽にAメロ、Bメロ、サビがあるように、このシーン（＝サビ）に行き着くためのリズムやテンションの流れを指揮者のようにUP・DOWNさせてみてください。そして歩美の心の流れもそこに寄り添って浮き沈みするように構成してみてください。

そしてもう一つ検討していただきたいのは俳優の喋り方ではなく、「聞いている」時の演技です。2人芝居の場合、1/2は聞いている時間、黙っている時間になります。その聞く演技にバリエーションがもっとあれば、より豊かなシーン展開が可能になると思います。特に序盤は歩美がひたすら質問する展開が続くので、みはるが何を考えているのか、それを聞いている歩美がどう思っているのか…がもっと細かく表現

されると、グッと楽しいシーンになると感じました。

最後に、ラストに歌詞入りの曲（ミスチル?）を使われており、そのサビで終わるために長めの三方札が続く…というのも惜しいと思いました。タメが長すぎて長い間が生まれていました。テンション高くええ感じに終わらせるのは素晴らしいアイデアです。もっと前のシーンから逆算して曲を入れてみてください。観客を待たせず飽きさせず気づかぬうちに、ドンッ！と感動させる…というのが美しいエンターテインメントだと僕は思っています。

③りんくう翔南高等学校「紅回廊の恋」

僕ら演劇人が「エンタメ系」と呼ぶ作品があります。いわゆるSFだったりファンタジーだったり、魔法・ロボット・妖怪…この世の日常を超えた設定を、バリバリの照明とビートのきいた音響と派手な衣装とメイクで見せる、殺陣ありダンスあり、まさにエンターテインメント性あふれる舞台のことです。本作は今大会の中でも珍しい、直球の「エンタメ系」作品だと感じました。演劇は総合芸術と呼ばれますが、エンタメ系は特にスタッフワークが命。もっと衣装や小道具を派手にキラビヤカにして、髪型やメイクにも趣向を凝らしてみてください。照明ももっと派手に、音響ももっとガンガンにかける！そして演技もテンション高く振り切って、日常シーン（ミステリー研究部のシーン）と古書の中のシーンとの差を出してみてください。つまり世界観を、も一っと色濃く主張してみてください。

美術を置かず、ホリを染めたり中割りの幕の開閉でシーン展開するのは上手いと思いましたが、やや暗めの明かりが続いて顔が見えないシーンが中盤にありました。その中で説明的なセリフが延々と続くと観客を作品から置いていってしまいます。SSを入れたりシーリングを足したり、表情が見える明かりを作ってみてください。舞台上の人を見せることで、設定説明をその人物が「どう聞いているか」を観客に見せることができます。そしてそれを見ることで、観客は自身がまるで登場人物になったかのように物語を受け止めていくことができるのです。エンタメ系ではどうしても世界観や設定の説明が必要になります。それを「俳優の見る、聞く、演技」を見せることで客席に無理なく共有させてください。

そして最も勿体ない！と思ったのはp31あたり、ラスト前の皆で斬り合うシーンです。ここがピークとして大爆発するように、俳優もスタッフも高いテンションで臨んでほしいです。観客が前のめりに舞台に没入するくらい熱量を高めてください。

エンタメ系作品の分かりやすい評価の一つは、終わった後に「ええもん見て興奮した！震えた！」と観客から万雷の拍手を頂けることにあると思っています。ぜひ、観た人皆がスタンディングオベーションしたくなるような、テンションアゲアゲの作品を作り上げてみてください。

④追手門学院大手前高等学校「合法演劇」

すごいもの観たな。それが僕の第一印象です。幕が開けた瞬間のパンクかつエネルギッシュな美術、衣装ヘアメイク、照明。そしてノイジーな音楽とセリフ。センスの塊やな！とずっとワクワクしながら観劇させていただきました。またセンスだけでなく、広い空間を巧みに閉じ込めたメインスペースを作りながら、上手に別エリアを作ってシーン展開していく演出技術の高さも素晴らしかった。力が抜けているけど強い芯があり、テンポが速いのに誰もセリフがかち合わない演技力も称賛に値します。そしてなにより全員が役にフィットしていました。実に洗練された、丁寧に計算されつくされた完成度の高さに唸られました。

内容も淡々とした会話の中にもそれぞれの葛藤が見え、特に尖杉さんのセリフは同じ作家である僕に痛いほど突き刺さりました。また尖杉さんと快樂くんの会話は後半になればなるほど色んな感情が見え隠れし、心を驚掴みにされました。快樂くんの最初のマイクパフォーマンスの熱さと、おさえた会話芝居との

落差、素晴らしいと思います。全体を通して「演劇なんて…」 「もう嫌だ…もう辞めたい…」 という意味合いの言葉が多々出てきましたが、「それでも好きなんですか？ やめられないんですか？ なら続けなよ！」とエールを送りながら41歳の僕は観ていました。僕自身、毒素が強かったり過激な言葉がある作品は決して得意ではなく、やや構えて観てしまうこともありますが、本作は惹きつけられ様々な事を考えさせられました。そのくらい訴える力のある作品だったと思います。

ただ残り時間が15分ほどあった…ということ踏まえての話になりますが、この作品の終わりのその先、もしくはここに至る以前を描いてほしいとも思いました。演劇は芸術でもあります、人を描いた「ドラマ」でもあると僕は考えており、登場人物たちの成長と葛藤がもっと観たい！と思いました。具体的にどんな傷つく出来事があるのかあの1ページ目に至って、そこから悩み苦しむ、そしてどんな答えを出したのか…明日はどうなっていくのか…そこを描くことで、「私はこんな世の中で、こうやって生きていくんだ！」という、作家としての立場表明を見せていただきたいのです。贅沢な要求ではありますがご一考ください。刺激的で繊細で、それなのにどこか優しさを感じた作品でした。

⑤大阪府立東百舌鳥高等学校「ぴえんからのぱおん ～コロナなんかぶっ飛ばせ～」

タイトルからして明るくパワフルな作品なんだろうな…と思い、結果、非常に楽しく観劇させていただきました。会話の中に演劇部の抱える等身大の苦悩が見え隠れし、コロナ禍ならではの時事ネタや演劇部ネタも多く、シンプルでありながら多層構造を持った作品でした。また少ない美術を巧みに使って、空っぽだった箱の中をラストに見せて希望を描く…というのは素晴らしいアイデアだと感じました。それ故に全体にもっとパワーとスピードが欲しかったように思いました。常にテンション高く、セリフも動きもキレキレで、音楽も照明もバリバリにぶちかまして欲しかったです。つまりこの作品は「より強く早く大きく」表現する事が大事だと思いました。特に劇中劇はもっとエンターテインメント性溢れる感じでキメキメでやってみてください。音楽も照明もカットイン連発でガンガン叩きつけるように出してみてください。そして劇中劇と、日常の部員ABとの「熱量差」を生み出してください。なぜならこの作品は戯曲を読む限り「悩める演劇部2人が、亡霊に出会って成長していく…」という大きな流れを持っているからです。亡霊と出会う前の2人（その劇中劇&2人の悩み）と、その後の2人（その劇中劇&その解決と成長）にもっと差を出し、それを見せることで抱える悩みを印象づけ、「でもコロナなんか負けてたまるかい！前に進むんじやい！」という答え（＝テーマ）を客席に提示してもらいたいのです。つまりは人の成長をもっと丁寧に強く観せてほしいのです。冒頭から一定のテンポとテンションで淡々と会話が続く印象が強く、亡霊の登場で強引に物語が変化していったように感じられました。亡霊役の演技は熱くて強くて素晴らしいと思えました。ぜひ、A役B役にも亡霊に負けないほどの強い葛藤と成長を感じるシーンを作ってください。今の世の中を変えるのは、あの世にいる見えない何かではなく、現実に現在進行系で生きているあなた達だと僕は思います。

この作品を観て、コロナを吹き飛ばすのは難しい理屈じゃなく若者たちのアツいエネルギーちゃうやろか？と思いました。すべてを吹き飛ばすほど汗だくで、熱量高い演技を、これからも期待しております。

⑥信太高等学校「たまゆら」

夕方の公園という固定された空間の中で、丁寧にそれぞれの関係性と葛藤が描かれた作品でした。登場人物も俳優がもともと持っている雰囲気とマッチしており、「ああ、いるいる！こういう生徒！」と思いつつながら観劇させていただきました。特に前半にあった男子のコント場面が面白く、朝一番の上演でありながら、観客席から笑いを呼び起こせたのは素晴らしい成果だと思います。またカップルの会話音を上手から下手にパンを振って通過しているように聴かせたり、ゆっくりとホリゾントの色を変えて時間経過を表

したり、空間を作るためのスタッフワークの工夫が感じられました。

僕が特に好きなのはラスト、皆がそれぞれの不安を吐露し、全員で手をつないで祈り（呪文）を唱えるシーンです。今の世の中における皆さんの願いや葛藤が伝わってきました。ただそれ故に、そこに至るまでの気持ちの流れがもっと序盤から表現されていれば良かったと思います。台本を読む限り、それは台詞にしっかりと書かれていたように思います。ではなぜそこが印象に残っていないのかということ、皆が丁寧に演じすぎて台詞テンポが均一で、観ていて「どこが大事なのか？」が印象に残りづらかったからです。だから前述のラストシーンも、やや突然に訪れたように感じてしまいました。「文化祭の内容を決めなければいけない中、登場人物たちが出会い、ぶつかり合っていく過程で、それぞれの抱えている葛藤が溢れ出す」というドラマの核となる部分をもっと意識して、外から演出が強調すべきセリフのテンポや強さをコントロールしてみてください。

そして起きた出来事の強弱を印象づけるためにセリフが無い時の演技…聞いている、観ている…いわゆる「受け」の演技にもっと豊かなバリエーションを持たせてみてください。起きる出来事・新たに聞いた情報に対し、それぞれの登場人物がどう思い何を感じるのか？を整理して、身体や表情、息づかいで表してみてください。僕はよく俳優に演技は「発信3割、受信7割」と要求します。「受け」の演技を積み上げていくことで、ラストへの流れと必然的な爆発力を生み出せます。ストーリーに整合性と厚みをもたせれば、必ずラストの盛り上がりで勝負できる作品です。ぜひチャレンジしてみてください。

⑦大阪府立豊島高等学校「あめふりこぞう」

真っ直ぐでとても愛らしい作品でした。皆の演技が一生懸命で力強く、パワーや情熱が最後まで途切れることなく客席に届いており、観劇後とても清々しい気持ちになりました。特に僕は雨降り小僧と翔太の健気な演技が大好きで、この2人のやりとりをずっと観ていたい！と思われました。大人は忘れがちですが、「全力で頑張る」姿を見せることも舞台俳優の技術の一つだと僕は思っています。だから豊島高校の皆さんはとても高い技術を持っておられると思いました。スタッフワーク面でも、場面転換が多いなか半透明のパネルに照明を当ててシーンを変えたり、スモークを効果的に使ったりと工夫を凝らし、妖怪が存在する手塚治虫原作の世界観を見事に表現されていました。ちゃんと部屋の中のシーンで靴を脱いで演じていたのも細部へのこだわりを感じました。そうした全員の愛や情熱がこの作品を支えていたように思います。

ただ多々ある場面転換を重ねていくことで、本来ならテンションや物語の熱量がラストに向けて上がっていくべき所がそうなりきれず、やや平坦になってしまっていた印象がありました。それはおそらく客席側の「慣れ」のせいであると思います。場面が変わる度に下手サイドの延長部分にサス明かり、舞台上は転換明かり（その間にイスを並べ替え）、音響は似た曲をクロス…という構成が幾つか見受けられました。そのリズムと繰り返されるパターンに客席が徐々に慣れ、最後の方は待ち時間に感じられていたように思います。場面転換の多い作品は意識して、観客に慣れさせないようにスピードの長短・テンションの緩急に差をつけるべきです。場面は切り替わりますが、そこに流れる主人公の気持ちは切れません。前シーンから主人公がどんな思いで次のシーンへいったのか…を整理し、時に長めの間をとったり、パンッ！と一瞬で変えたり、UP・DOWNを主人公の気持ちに沿ってつけてみてください。そしてラスト、大人になった翔太が雨降り小僧と再会する所で、最大級に盛り上がるよう逆算してみてください。

僕は演出することは、オーケストラの指揮者に似ていると感ずることがあります。一番の大サビで盛り上がる（カタルシスを生み出す！）よう全体をコントロールしてみてください。ラスト、もっと号泣できる作品になると思います。

⑧追手門学院高等学校「学校へ行こう」

とても興奮しました。ハイスピード、ハイテンポ、ハイテンション、僕も普段それを売りにする作演出をしておりますが、これほどのものはなかなか難しい。そして俳優陣の息が誰も切れていなかったこと、空手をするシーンでしっかり腰を落とされていたことに心から賛辞を送りたいです。こうした作品は時々身体やブレスのコントロールが出来ず、荒々しさやバタバタ感が出てしまうのですが、それがまったくなく極めて上品上質。ナイスフィジカル！ナイス重心！そしてナイス脱力！でした。

美術がなくても立ち位置やフォーメーション構成で飽きさせず、入りハケも全て計算されているのにも唸られました。それはまるでヨーロッパの組織化されたサッカーチームを観ているような爽快感でした。僕は脚本家として「ドラマが大事！」「作品は人間の葛藤を主軸に描くべき！」「起承転結のリズムをつけて！」と吠えているのですが、そういう理屈も「まあ…ここまでやってくれたらええか！」と思えるほど、魅力をもった作品だったと思います。

ベースラインを奏でるリズムカルな音響と、タイミングバッチリな映像も素晴らしかった。そして何より個々人の俳優の「何かやっつろ、爪痕残したろ」意識が高く、個人的に眼鏡男子の何気ない役でも濃ゆく演じておられたのが印象に残りました。あと肺魚！そして全員が「聞く」演技ができていた事も称賛に値します。セリフが無い時でも演技が切れず、その役に意味をもたせる工夫が感じられました。とにかく60分詰め込みに詰め込まれた作品、お腹いっぱいです。ごちそうさまでした。

ただ、その過剰な満腹感がこの作品に残された課題であるかもしれません。贅沢な要望ではありますが、想像力の余白…観客が受け身になるのではなく「もしかしたらこの先～になるんじゃない？～になってほしいな！」と思わせる瞬間があればいいと思いました。この作品にそぐわないかもしれませんが、誰かの強い葛藤が観られれば、僕はもっと感動できたと思います。意図的にどこかでブレーキをかけ休ませたり、空白の間を作ったりして、観客の心の流れもコントロールしてみてください。それができる実力とメンバーが揃っていると思います。

⑨東海大学附属大阪仰星高等学校「生きていたんだよな」

後頭部を鈍器でガツン！と殴られたような、そんな印象の残る作品でした。戯曲そのものの重厚さもさることながら、全俳優の演技が全力で力強く、この作品の根幹を支えていました。格闘ゲームでいえば強パンチだけで闘う、モンスターハンターでいえば大剣一択のような演技でした。僕は大好きです。一人で複数役を演じられていましたが、どの役も個性が強く、丁寧に作り込まれていました。熱演の極みだと思います。

それ故に、もっと俳優たちを活かした演出をした方が良かったのでは…と思うシーンがありました。音響や照明も演技と同じく力強く、それぞれインパクトがあって素晴らしかったのですが、それが俳優よりも前面に出すぎて（意図的なものかもしれませんが音量も大きすぎて）登場人物たちへの感情移入を遮ったり、繊細な心の機微を上塗りしているように感じてしまう時がありました。確かに劇中の状況は生死を選ぶハードかつ理不尽すぎる場面です。しかし3人の心中は現代の学生たちそのもので、ガラスのように繊細です。ならばどこかで場の状況ではなく、登場人物の心情に沿った静かで優しい明かりと音で見せても良かったのではないかと…と思うのです。そうすることで3人の生への望みのようなものがもっと際立ったのではないかと想像します。同様の意味で、天の声＝生死意思確認の声にも、もっとリバーブやエコーを掛けて人間臭さを消してもらいたかったように思います。終盤にやってくる「どちらか一人しか戻れない」という選択と決断を迫られる事象も、やや突然感が強く、積み上げた登場人物の心のやり取りを止めてしまっている印象がありました。そこに至る伏線やルールを序盤から出し、後半は3人の細かな気持ちの変化で勝負！な作品が観たかったです。僕の好みではありますが。

今年は「自殺」という文字を目にする事が多くありました。それは不幸です。でも大事なことは、皆が「自殺が駄目だ！」と声高に叫ぶだけではなく、自ら死を選ぶほどに弱り傷ついた人々に、そっと寄り添

うことなのではないか？とこの作品を観て考えました。これからも傷ついた人々に寄り添える、そんな熱演を期待しております。

⑩近畿大学附属高等学校「サマータイム・ドリーマー」

まさに高校生の皆さんにしか演じられない日常の何気ない会話を繰り返しながら、やがてそれがずれ、最終的に全員の抱える問題が見える…というユニークな構造を持った作品でした。しかし構造以上に登場人物が魅力的で面白い！3人の女子高生たちのテンションの高さ！それと対照的に何ともいえない魅力を放つ男優陣。特にマコトが歌うリトルグリーモンスター、彼氏の何とも言えないキャラ&ヒョロ感、ネットとして台に横たわる卓球、最高でした。

パラレルワールドを繰り返していく中で、じわじわと引っかかっていく台詞や設定が随所に散りばめられているのも良かったです。最初は正直「長いな…意味あるんか？」と感じたインスタやスイパラの下りも、別シーンでのちょっとした伏線になっていたり、出てくる小道具が変わっていたり、面白い仕掛けを作られていました。音響照明も、電車の中のシーンや、繰り返す度に少しずつ歪んでいく世界を効果的に表現されていたと思います。

ただ僕が気になったのは、この作品は「誰の」「何を」観せる物語なのだろう？という点です。というのもチサから始まった物語なのに、彼女がそれなりに世界を受け入れていたように見え、終盤に突然アキの告白が始まり、それにつられて突然チサやリエの心情吐露が始まったように感じてしまったからです。主人公は誰だったっけ？そんなに3人とも悩んでいたの？と勝手に思っていました。もっと物語冒頭に元の（何も起きていない）3人の関係と設定を客席に与える時間があれば良かったと思います。そして物語の始まりはチサからなので、チサに比重をおいた葛藤と成長を描いてみてください。彼女が元の世界に戻ろうと必死に努力していく中で、抱えていた思いが吐露される…という構図にした方が物語に一本の筋が通ると思います。物語のキーにリエやアキの悩みがあったとしても、それをチサが聞いてどう思ったのか、どう解決しようとしたのかをもっと描いてください。SFであっても、中心に描くべきは人の心＝「葛藤」「成長」であると僕は思っています。構図や設定そのものは素晴らしいので、ぜひそこに「人」をじっくりと描いてみてください。